

「アイルランドと E U : 歴史的発展とその含意」

東洋英和女学院大学・小久保康之

1) はじめに

アイルランドの人口約 445 万人 (E U 総人口の 1 % 未満)

同面積は 70,300 平方キロメートル (北海道とほぼ同じ)

なぜこの小国が注目されるのか :

ニース条約とリスボン条約を国民投票で「否決そして可決」という綱渡り

E U の恩恵を最も受けた国 (「ケルトの虎」) であるのに国民はなぜ否決した ?

アイルランドの動向は特殊アイルランド的なものに留まるのか ?

それとも、E U 全域に共通する新たな潮流の一端なのか ?

2) 独立から 1950 年代まで

1922 年に英連邦内の自治領として発足。アイルランド自由国憲法制定。

1937 年 アイルランド憲法制定

1949 年 英連邦を離脱して、共和制を宣言

1930 年代の中立政策の選択 : ドイツにも英国にも与しない。

当初反英的であった中立政策は、その後核抑止、冷戦、植民地主義に対する中立へ
N A T O にも加盟せず。

独立を追求する機運が強く、保護主義的な政策を推進。

3) E E C への加盟

英国への経済依存度が極めて高く、英国の E E C 加盟申請に併せて加盟申請を行う。

それまでの保護主義的政策から、多国間主義、E E C との関係強化へ路線転向
経済の近代化を進めるため。

E E C 加盟は対英依存を緩和させ、対英自立を促すことに繋がる。

加盟にあたって、中立政策が問題となるとは考えていなかった。

4) 「ケルトの虎」への道

単一市場、共通農業政策、構造基金からの恩恵を受ける。

1972 年には一人当たり G D P が E U 平均の 66 % であったのに対し、2008 年には 150 %。

E M S への参加により、英国ポンドとのリンクから離れる。

外資 (アメリカや日本) の導入による経済発展が著しかった。

中立政策は必ずしも同国のEUへの忠誠心に傷を付けるものではない：アムステルダム条約を批准し、E R R Fにも参加するなど、EUの共通防衛政策にも関与を強める。

1987年の単一欧州議定書の批准に際して、憲法違反であるとの提訴があり、最高裁判所は、EUに関する条約に関しては、同国憲法第1条に規定されている主権の移譲を含むものであり、憲法改正（国民投票）が必要であるとの判断を下す。

これ以降、アイルランドはEU条約の改正には必ず国民投票を実施。

5) ニース条約の批准

2000年に入ると、アイルランドの拡大予算に対してEUから批判が出てくる。

アイルランド市民のEUに対する否定的雰囲気背景となる。

2001年6月7日 国民投票で否決

投票率 34.8% 賛成 46.1% 反対 53.9%

世論調査の結果によれば、反対票の多くは、情報の欠如と理解不足によるもの。

欧州理事会は、アイルランドにESDPへの自動参加義務を免除して中立政策との両立を保障

2002年10月19日 国民投票で可決

投票率 48.47% 賛成 62.9% 反対 37.1%

6) リスボン条約の批准

2008年6月12日 国民投票で否決

投票率 53.1% 賛成 46.6% 反対 53.1%（有権者の28.3%）

2008年12月の欧州理事会：欧州委員会の委員の一を各加盟国1名とすることで合意

2009年6月の欧州理事会：アイルランドに基本権憲章（倫理・社会政策・中絶禁止）課税権、軍事的中立について理解を示す付属文書を採択

2009年10月2日 国民投票で可決

投票率 59.0% 賛成 67.1% 反対 32.9%

7) 考察：EUの「問題児」？あるいは新たな課題の提示？

拡大EUの中で、少数派となり、ユーロ懐疑主義的になってきている。

もともと、EU加盟を経済的視点で捉えており、EU統合を政治プロセスとは国民が認識していない。

EUに参加することで、「ヨーロッパ化」が進んだ部分もあるが、国内の世論を変えるまでには至っていない。

EU加盟による利益を十分に国民が理解していないし、またEUの存在は遠いものであり、身近なものとはなり得ていない。

参考文献

- ・ 田中俊郎「アイルランドとリスボン条約」『海外事情』平成 21 (2009) 年 9 月号。
- ・ 田中俊郎「リスボン条約とアイルランド」慶應義塾大学法学部編『慶應の政治学 国際政治』慶應義塾大学出版会、2008 年 12 月。
- ・ 児玉昌巳「アイルランド国民投票におけるニース条約の否決と EU 政治」『同志社法学』第 282 号、第 53 巻 6 号、2002 年 2 月。
- ・ Brigid Laffan and Ben Tonra, “Europe and the international dimension”, in edited by John Coakley and Michael Gallagher, *Politics in the Republic of Ireland, fifth Edition*, Routledge, New York, 2010.
- ・ Brigid Laffan and Jane O’Mahony, *Ireland and the European Union*, Palgrave Macmillan, New York, 2008.
- ・ Ben Tonra, *Global citizen and European Republic: Irish foreign policy in transition*, Manchester University Press, Manchester, 2006.
- ・ Gerda Falkner and Brigid Laffan, “The Europeanization of Austria and Ireland: small can be difficult?”, in edited by Simon Bulmer and Christian Lequesne, *The Member States of the European Union*, Oxford university press, Oxford, 2005.
- ・ Jane O’Mahony, “Ireland and the European Union: a less certain relationship”, in edited by Neil Collins and Terry Cradden, *Political issues in Ireland today, Third edition*, Manchester University Press, Manchester, 2004.
- ・ Edited by Jim Hourihance, *Ireland and the European Union*, The Liliput Press, Dublin, 2004.
- ・ Richard B. Finnegan, “Ireland: Brussels and the Celtic Tiger”, in edited by Eleanor E. Zeff & Ellen B. Pirro, *The European Union and the Member States*, Lynne Rienner Publishers, Colorado, 2006.
- ・ Edited by Patrick Keatinge, *Ireland and EC Membership Evaluated*, Pinter Publishers, London, 1991.
- ・ Frances Nicholson and Roger East, *From the Six to the Twelve: the enlargement of the European communities*, Longman, Essex, 1987.

など